

# ヨコハマ人・まち

第32号

—まちへ人がまちをつくる—

発行：横浜市 都市整備局 都市づくり部地域まちづくり課  
Tel 045-671-2696 Fax 045-663-8641 E-mail tb-chiikimachika@city.yokohama.jp  
取材・編集：NPO法人 市民セクターよこま  
Tel 045-223-2666 FAX 045-223-2888 E-mail daihyo@hamacen.jp

## ■新しい視点 防災の新しい主役達

…男女共同参画センター横浜南「ヨコハマ わたしの防災力ノート」 / NPO法人I love つづき「サバイバルジュニア」

## ■地域の現場から 防災で地域のつながりを取り戻せ

…滝頭・磯子まちづくり協議会(磯子区) / 一本松まちづくり協議会(西区)

### 特集

## 防災はまちの元気の源だ

今回の特集は防災です。横浜市には防災力を着実に高めている地域や団体が数多く生まれてきて

ています。今回は、女性・子どもの視点からの取組みと、二つの木造住宅密集地の取組みをご紹介します。インタビューの中で見えてきたことは、防災まちづくりは、まちを視る力を高めたり、まちのさまざまな力を掘り起こしたりするきっかけであるということでした。

### 新しい視点

## 防災の新しい主役達

今回は新しい視点を持つ防災まちづくりの活動として、男女共同参画センター横浜南の「わたしの防災力ノート」、NPO法人I love つづきの「サバイバルジュニア」を取り上げます。それぞれ、女性と子どもという視点から、防災を捉えなおすことで、まちづくりを進めていく際の本当に大切なことは何かを問いかけてくれます。



## 男女共同参画センター横浜南 「ヨコハマ わたしの防災力ノート」

女性  
の  
視点

『ヨコハマ わたしの防災力ノート』には、女性の視点から防災を捉えなおすことで、老若男女関係なく、地域に住むひとりひとりが、「安心できるまちと暮らしづくり」のために大切にしたいことがブックレットとしてまとめてあります。今回は、その事業を担当した男女共同参画センター横浜南（以下フォーラム南太田）の常光明子さんにお話を伺ってきました。

フォーラム南太田は、より地域に密着した男女共同参画事業を展開するため、横浜市が設置した男女共同参画センター3館（戸塚区・青葉区・南区）のうちの一つで、2005年に開館しました。

「男女共同参画という視点をいかして、地域とつながった事業をやっている」とフォーラム南太田では考え、女性が考える防災のまちづくりを大きなテーマに掲げました。

### ■ゼロからのスタート

事業が始まった2006年当時は、女性の視点から防災に取り組む事例は横浜にあまりありませんでした。そこで、都市で起こった災害として、阪神・淡路大震災の経験を直接聞くことから活動を始めました。その中で、課題として浮かび上がってきたのは、授乳や着替えの問題、避難所での性暴力など、災害時の女性ならではのリスクです。そこで、被災下で女性たちが直面した課題を、横浜でどのように伝えるかを、まちづくりや防災・防犯に取り組む横浜の女性リーダーたちと市民企画委員会を立ち上げ、議論を重ねました。その中で、パネルディスカッションも開催し、阪神・淡路大震災での学びや横浜での取組みを地域の人へと伝えていきました。

2007年度には4回の「子育てママの防災おしゃべりサロン」、400人の女子大生への「防災に関するアンケート」を実施し、横浜に暮らす女性の防災意識を見直しました。

そして、2008年度、今までの取組みを広く伝えるために『ヨコハマ わたしの防災力ノート』を製作しました。『ノート』は、「防災はイメージする力」「防災はつながる力」「防災はあきらめない力」という三つの章に分かれていて、自宅に必要な備えや、日頃の地域活動のなかでどのようなことを意識するかを考える構成になっています。製作の過程では、地域の防災関係者や市民グループ、地元企業の協力が大きな力になりました。



### 防災はあきらめない力 2009

～災害への不安を力に変えていくわたしたちの7つのことば

- 1 生き残る。何が何でも生き残ろう
- 2 非常時こそ、熱くならない
- 3 あきらめない。でも、頑張り過ぎない
- 4 他者の辛さや苦しさを否定しない。「非常時だから我慢しろ」とは決して言わない
- 5 非常時には女性なり男性なりの不自由さ、違いがある。お互いに尊重しあおう
- 6 避難場所の運営には女性も参画しよう。心身を守るオアシスを必ず作ろう
- 7 もしものときに頼れるのは、いつもの人間関係。今このときから人の縁を大切にしていこう

☆『ヨコハマ わたしの防災力ノート』は、<http://www.women.city.yokohama.jp/bousai/>からダウンロードできます。

## 特定非営利活動法人 I love つづき 「サバイバルジュニア」

子ども  
の  
視点

都筑区を中心に活動しているI love つづきは、2005年～2008年の間に計4回、大学や企業などの協力を得て、「サバイバルジュニア」と呼ばれる小学生向けの防災事業を進めてきました。今回は、事業の企画・実施に携わってきた同理事長の山岸紀美江さんにお話を伺いました。

### ■子どもと向き合ってきた活動

I love つづきは、環境、情報、子育てなど様々な視点から都筑区のまちづくりに取り組んでいる団体です。I love つづきは常に子どもに向き合ってきた活動してきました。

都筑区では、港北ニュータウンが開発されはじめた1980年代に、一気に若い世代が入ってきました。しかし、事業はハード整備が重要視され、コミュニティづくりに関するところまで手が回っていないようでした。その時、地域のコミュニティをつくっていく際に、大きな力になったのは、子育てをしている親たちでした。そうした背景の下、都筑区で行われた生涯学級の集まりから始まったI love つづきのメンバーは、自然に、子どもたちと向き合うことになったのです。「今、子どもが犠牲になる事件も増えており、その中で、子どもたちは経験も浅く、幼く、弱い立場です。そんな子どもたちに自分の力で生きていくことを伝えたい」と山岸さんは語ります。

### ■防災は自分の「尊厳」を守ること

防災は自分の尊厳に関わる重要な問題です。『ノート』の中にも「生き残る。何が何でも生き残ろう」という項目が挙げられています。最後に今後のことを伺うと「たくさんのかたに読んでいただきましたが、いちばん最初に電話をくださったのは、ひとり暮らしの高齢女性でした。今後は、地域のなかで孤独感や不安感を強く抱えている単身世帯の方々の安心安全にアプローチしていきたい」とのことでした。

阪神・淡路大震災から15年。この機会に皆さんも、自分自身で身を守る備えや身近なコミュニティとのつながりを見つめなおしてはいかがでしょうか。

### ■子どもが地域の防災活動の担い手に

「子どもたちに自分の力で生きること」を伝えるためのプログラム、サバイバルジュニア育成事業。小学3年から6年までの子どもを対象にしたこの事業は、一過性のイベントではなく、キャンプ体験から、身近な地域の調査、シンポジウムでの発表までの継続的なプロセスからなるプログラムです。最初のキャンプ体験では大学の体育館を借りて、荷物のまとめ方、サバイバルな状況での食事づくり、ダンボールを使った寝床づくり、防災まちあるき、応急手当などの防災訓練を通して、知識と経験の獲得を目指します。そして、キャンプ後に自らが行う自宅周辺の防災マップづくりと家の中の防災対策を通して、実践へ結び付けていきます。最後に、これらの成果を子ども防災シンポジウムで発表し、晴れて、大地震などの災害時に地域の情報に詳しく、正しい判断で行動し、自分の身は自分で守ることができる「サバイバルジュニア隊員」として認定されます。子どもたちに「自分で生きる力」を身に付けてもらいたい、学校だけではできないことを教えたいというI love つづきのメンバーの思いは、年毎に様々な工夫を加えながら数多くのサバイバルジュニア隊員を輩出してきました。このような子どもたちを主役とした試みは、さまざまな視点からまちを見つめなおすきっかけになっているようです。

## ■広げていく活動

山岸さんは今後の展開について「サバイバルジュニアの成果を小冊子にして、他の地域へも広げていきたい」とおっしゃいます。現在、I love つづきでは「サバイバル」r.ハンドブック」を作成しています。作成途中のものを見せていただきましたが、防災訓練のメニュー、まちあるきを行う際の子どもへの配慮、発表をするときの時間や注意する点など、細かなところまで、具体的に書かれていました。

最後に、今後の抱負を尋ねると、「都筑にこだわりたい」という言葉が返ってきました。都筑に暮らす生活者としての視点を大切にしつつ、一人ひとりの力を地域の力へと変えていく。そんな想いを感じることができました。

様々な活動を発想し、実践しているI love つづきですが、

その活動の秘訣は一体何なのでしょう。山岸さんからは、こんなヒントを頂きました。「運営者側の気づきや成長が重要」ということです。活動の中で、地域に貢献していると感じる瞬間や自分の成長を感じる瞬間を大切に。そうしたことが、様々な苦難を乗り越えて、地域を動かすパワーになっていくようです。地域のなかで、自分たちが本当にやりたいと思えることを改めて見つめることの大切さを学びました。

## なまずくんのワンポイント防災ヒント

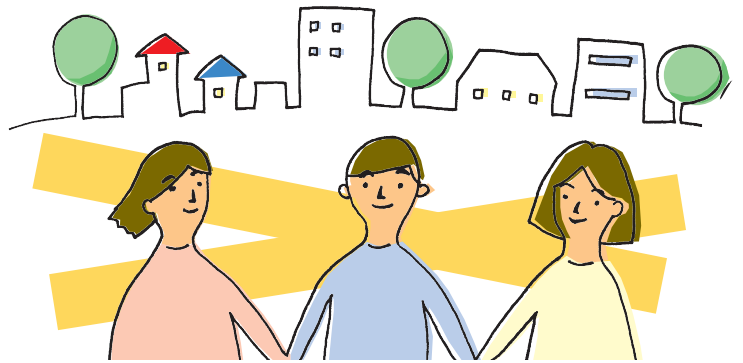
わたしの防災力ノートもサバイバルジュニアも成果をきちっとまとめようとしてるね！  
それが他の人たち・地域へとつながるんだな！



## 地域の現場から

### 防災で地域のつながりを取り戻せ

木造の住宅が密集している地域は、道が狭かったり、建物の耐震強度や防火性能が低かったりして、非常に危険です。特に横浜は坂が多く、階段などで消防車や救急車が入れないようなところもあります。横浜市では、防災上課題のある密集住宅市街地において「いえ・みちまち改善事業」を進めています。今回は、そうした二つの地域のまちづくり協議会にインタビューです。



## 滝頭・磯子 まちづくり 協議会



滝頭・磯子まちづくり協議会（以下、協議会）は、2005年6月に、マーケットとそれを取り囲むようにある7つの町会によって結成されました。そして、2007年10月には協議会が作成した「滝頭・磯子地区 防災まちづくり計画」が、横浜市中区で初めて「地域まちづくりプラン（※注）」として認定を受けました。今回は、早い時期から生活の中の重要なテーマである「防災」に取り組んでいる協議会の皆さんに話を伺ってきました。

## ■本音で話せる仲間をつくる

防災まちづくり計画認定後、協議会は、狭い意味での防災に捉わられることなく、地域を安心安全に、そして元気にするためのたくさんの取組みを実践してきました。禅馬（ぜんま）ふれあい花広場の整備（写真左）、安否確認票の作成、狭あい道路

の拡幅、掲示板の設置、防災マップの作成、ニュースレターの発行、浜マーケット地区（写真中）地域まちづくりルールの策定、イベントスペースの設置（写真右）など、数年の間にさまざまなことを積み重ねています。特に、花広場やイベントスペースの整備、そしてニュースレターの全戸配布は、地域で生活を営む人に直接目に触れるので、「見たよ」と声をかけてくれる方もいて、協議会への関心が高まるのを感じているようです。

地域みんなの力を合わせ、実践を積み重ねるには、メンバー間の信頼関係が欠かせません。本気で話し合える仲になるのにはどれくらいかかったかとどうと、「準備期間を含めると、3～4年くらいかかった」と皆さん顔を合わせながら答えていただきました。そうした信頼関係は、夢を語るだけでなく、汗を流して共に行動する中で培われているようです。

## ■つながりを生み出すまちづくり

最後に、インタビューをさせて頂いた皆さんに活動を行う上で、大切にしていることをお伺いしたところ、皆さんにそれぞれ一つひとつ達成したい目標があることが分かりました。まちづくりのルールをしっかりとつくりたい、住んでいてよかったと思えるまちをつくりたい、別の地域で実践をひろげていきたいなど、様々な思いを伺うことができました。その根底にあるのは、「人と人とのつながりを大事にしたい」という共通した思いでした。その共通した思いが、防災まちづくり計画認定後、一つひとつ形になり、地域に住む多くの人に少しずつ広がって

# 一本松 まちづくり 協議会



野毛山動物園の西側に位置する2つの谷あいには古い木造住宅が密集している地域が広がっています。羽沢西部自治会と西戸部二丁目第一自治会の二つの自治会によって結成された一本松まちづくり協議会（以下協議会）は、その密集住宅地（西区西戸部町）の防災まちづくりを行っています。階段や細い路地の多い風景の合間に、ランドマークタワーがあらこちらで顔を見せる、そんなまちでインタビューです。

協議会は、横浜市の「いえ・みち まち改善事業」をきっかけに、2006年6月に結成され、2008年8月には協議会で作成した「一本松まちづくり協議会 防災まちづくり計画」が横浜市の「地域まちづくりプラン」に認定されました。今回は、地域まちづくりプラン認定後に実際にどのようなことを行っているか、話を伺ってきました。

## ■困難な状況でも、今できることをやっていく

協議会では、雨水タンク（写真左）、かまどベンチ（写真中）、井戸（写真右）などの整備を着々と進めています。最近では、他の地域からの視察も増えてきました。

道路を拡張しようと思っても、階段が多かったり、土地に余裕がなかったりして、なかなか前に進めない。協議会の方たちは、困難な状況に直面しても、愛着のあるこのまちを今よりも安全で、もっと住みよいまちにするために、地権者などに粘り強く交渉を続けています。そして、同時に今できることを行っています。会長の米岡さんは「まずは、一か所でも整備して、成果を地域の人たちに知ってもらいたい」と話していました。

### ●まちづくりについての情報を募集しています。

まちづくりに関するイベントや参加者募集、地域で行っているまちづくりの取組みなどの情報を下記までお知らせください。このページ及びメールマガジン「ヨコハマ人・まち」で広報のお手伝いをします。

情報提供のあて先：

横浜市 都市整備局 都市づくり部 地域まちづくり課

Tel 045-671-2696 Fax 045-663-8641

E-mail tb-chiikimachika@city.yokohama.jp

きているようです。

住み続けたいと思えるまちがあって、想いを本音で語り合える仲間がいる。丁寧に一つひとつの取組みを積み重ねるなかで生まれる信頼感こそ、まちの本当の財産ではないでしょうか。

## なまづくんの7nポイント防災ヒント

地域の防災力は、最終的には住んでいる人の意識。意識が変わるためには、できることを形にして、それを、より多くのまちの人に伝えていくことが大切なんだなあ。



## ■お互いの得意をしっかりと意識しあって、協力関係を築く

2つの自治会がタッグを組んで活動している協議会。うまくいく秘訣は何かとお聞きすると、「はじめに、お互いのまちの違いを認識すること、そしてお互いに助け合うこと」という答えが返ってきました。行政やNPOと協働する時も、法律などの専門的なところは、行政やNPOに担ってもらい、自分たちは地域のひととの連絡や交渉の部分をしっかりやるといったようにお互いの強みを活かし合っています。「自分が得意なことを頼られると、つい自分が頑張ろうという気持ちになる」と副会長の八木下さんは話していました。

## なまづくんの7nポイント防災ヒント

- ・目標に向かって、お互いの得意を活かす！  
そうすれば、頼ることも頼られることもスムーズ！
- ・できるところを一つでも実現して  
地域の人の関心を高めることも大事だよ！



## ※注 地域まちづくりプラン

この認定制度は、横浜市地域まちづくり推進条例に定められたもので、地域の目標・方針やものづくり・自主活動など課題解決に向けた取組みを、地域まちづくり組織が地域住民等の理解や支持を得ながらとりまとめた計画として、市長が認定する制度です。

(参考 <http://www.city.yokohama.jp/me/toshi/chiiikimachi/katsuyou/pl-ninteibo.html>)

「ヨコハマ人・まち」のメールマガジンは地域まちづくりに関心のある方への転送、お誘い大歓迎です。

メールマガジンの配信申込み・停止は、下記のアドレスからお願いします。

<http://ml.city.yokohama.jp/mailman/listinfo/hitomachi>

★「ヨコハマ人・まち」バックナンバーはこちら

[http://www.city.yokohama.jp/me/toshi/chiiikimachi/hitomati/back\\_num/](http://www.city.yokohama.jp/me/toshi/chiiikimachi/hitomati/back_num/)